

『天平の甍』に描かれた日本入唐僧群像 ——鑑真像についての分析を兼ねて

趙 秀娟*

The characters of Ganjin and Japanese Bonze Students in novel Tenpyo no Iraka Xiujuan Zhao

Abstract: In this article, an analysis of the historical descriptions about Ganjin's voyages to Japan and the main characters in To Daiwajo Toshoden is done. Combined with a dissection of the characters analysis to the novel Tenpyo no Iraka, the representative reflections on the occurrence in Japanese modern literary works and the changes of modern evaluation angle of these characters is revealed.

Keywords: Yasusi Inoue; Tenpyo no Iraka; Japanese Bonze Students; Ganjin

一

『天平の甍』は井上靖歴史小説の嚆矢で、中国唐代名僧鑑真のことを史実に即しながら書いたほか、普照をはじめとする日本入唐僧たちの運命も見事に描いた作品である。天平時代に日本の留学僧が高僧鑑真を日本に招き、戒律を伝えたという大きな文化事件を背景に、作中人物それぞれの人生が描かれている。

作者は歴史上無名な留学僧たちの人間像と、それぞれに異なる運命にスポットライトをあて、同時代人間の様々な生き方をその簡潔、且つ謹慎な筆触を通じて見せてくれた。作品中、栄叡、普照、玄朗、戒融、業行という五人の日本入唐僧はいずれも極めて平凡な人間だと見えるが、その不遇な運命は鑑真渡日という大きな歴史的イベントを背景に、微弱ながらもそれぞれ異なった光を放った。

二

『天平の甍』を創作するにあたって作者が使用した主な参考資料は『唐大和上東征伝』である。この文献は日本で初めて戒律を唱えた唐僧鑑真の弟子思託がつづった内容を、後に奈良の文人淡海三船が抄したもので、遣唐使の資料として数少ない貴重な文献とされている。その記述は簡潔且つ流暢で、文章も彫琢されていて、人の心を攫む魅力に富んでいる。したがって、「伝記文学における優れた作品」であるとともに、「その豊富な記載内容によって、八世紀前半の唐代歴史研究上の重要史籍」¹⁾とも評価される。

『唐大和上東征伝』においては、僧栄叡、普照は高僧鑑真を日本に招く重要な人物として描かれている。作品中、栄叡の名前は二十回ぐらい、普照の名前は十七回出てくる。その中で二人の

* 北京理工大学 講師

の名前は常に栄叡の後にあり、その重要性も栄叡に次ぐのである。しかも、栄叡についての描写名前が並んで出るのは十回ぐらいだが、いずれも「栄叡、普照」という順番である。即ち、普照も普照よりはずっと多い。よって、人物の重要性と働きから言えば、『東征伝』における栄叡は普照より優っていることが分かるだろう。もちろん、『東征伝』は鑑真の人物伝として、主要人物でない栄叡と普照の性格や心理活動についてはそんなに詳しく書いてはいず、ただ高僧鑑真を日本に招くために力を尽した留学僧として簡潔な言葉で描いたのが伺える。

ところが、『天平の薨』の中では、栄叡と普照は鑑真渡日のために生涯を投げ打った主要人物として登場している。作品におけるこの二人は作者の創作苦心を著しく表す人物で、特に普照はその重要性が鑑真にも劣らぬ存在である。最初に使命を受けてから、さまざまな苦労を経て最後の渡航成功に至るまで、普照は終始一貫して事件を客観視し、叙述者としての実際的な役割をも果たす。作者は普照の目と言葉を通して事物や人物を観察し、栄叡の使命感と熱情、玄朗の卑怯さ、戒融の無頓着さ、業行の執着、それらすべてが普照の目を通して、本来の面目ではっきりと鮮やかに描かれ、懸命に生きる人々の美しさと悲哀を深刻に表現し出す。「小説の叙事的構造を支える普照の目、その無私なる目が、実は作者その人の目、歴史に対する深い感慨を潜めた、その意味が抒情的な作者の目にほかならぬところに、叙事文学にして抒情文学という、この小説のより内的な特質がある。」²⁾したがって、普照は作中人物の中で、作者井上靖が最も力を注ぎ、考えを絞って造型した人物と言えよう。

作品中、普照の心理活動に関する描写も、他の人物と比べては非常に豊富で深刻である。はじめに渡唐させられると聞いたとき、普照は「いつも自分のことしか彼は頭の中になかった。戒師を招ぶことがどのような意味を持つかということにはあまり興味はなかった。」³⁾即ち、普照は経典と仏法の勉強による「自己完成」という熱望をこっそり持って渡唐したのである。しかし、揚州の大明寺で高僧鑑真が身をもって渡日して伝戒することにしたと聞いた時、「一座は水を打ったようにしんとなっていたが、総てはこの間に決まったようであった。普照は自分が奇妙な、名状し難い酩酊感の中に置かれているのを感じていた。」

こういう「奇妙な、名状し難い酩酊感」の中で、普照の内心に大きな変化があった。それは留学僧としての使命感への自覚である。これまでに自分自身が追求してきた狭い「自我」よりもっと意義のあることを発見して、以前の心理状態から鑑真を招く事に歴史的使命感を感じ、積極的に身を投じ、渡航に一生懸命力を注ぐようになるのである。しかし、何度もの難破と様々な苦労に、思わぬ出来事が相次いで起こる間、普照は鑑真を招くことに疑惑を感じることも免れず、その気持ちは非常に複雑になる。一方では、普照は鑑真と死生を共にするうちに、高僧の人格に魅了され、そのけがれない気高さに深く心を打たれ、鑑真が日本に渡って授戒することに非凡な意義があると切実に感じるようになった。他方では、「鑑真のような高僧をこれからも生死のほども判らない渡海の冒険に誘うことがいいことか悪いことかすぐには判断できなかった。」これらを顧慮した結果、普照は鑑真に自分の考えを語って、鑑真と別れ、新しい放浪生活を始める。業行の写した山ほど多い経典を日本に持ち運ぶ仕事に、「普照は自分のこれからの生命を賭けようと思った」。最後に運が巡ってきて、遂に帰国する機会に恵まれ、鑑真一行が日本に渡航することが可能になる。その時、鑑真によって伝えられた新しい戒律が必要かどうかについて奈良の学僧たちと激しい討論があった。普照は鑑真側の代表として論敵に勝ち、その名声も大いに上がった。このことによって、何十年来持っていた「自己完成」の念願がかなった。このように、普照の心理変化は初めから終わりまで完全に描かれていて、個人としての心の成長もはっきり窺える。

実際に資料を調べてみると、論弁に当たって鑑真側の代表として出たのは、思託か普照かについては、仏教辞典にも二様に記載されているが、作者は「この討論において論敵を破って新渡の律をひろめる動機を作った栄光を小説家の立場から日本僧普照に負わさせてもらった。」⁴⁾ また、業行が経典を写したことも、普照が経典を日本に持ち運ぶ仕事も、『東征伝』をはじめ史書には全

然記録がない。にもかかわらず小説展開としてはごく自然で、「真実」のように見える。ここにこそ作者の意匠が見られる。

普照に対し、同時に入唐した栄叡は前向きで情熱に満ちた人物として描かれた。最初から伝戒の師を請ずることに歴史的使命感を感じ、敢然と「少なくともわれわれの使命はわれわれ二人の生命を賭けるだけの価値はあるようだ」と言った。その後も始終変わらずこの使命に根気強く精力を注ぎ、最後まで成功を確信した。こういう栄叡の「不屈な闘志」こそが色々苦難を経ても終始一行の決心を支える大きな力になった。「普照の心には、計画が蹉跎する毎に鑒真を日本に招ずるということに対する疑惑の念が頭を擡げてきたが、いつも栄叡の不屈な闘志に押し切られていた形であった。」その間、渡航のことが誤解され、官吏の逮捕を免れるために池の泥の中に隠れたり、逮捕されてから病死だと取り計らってもらって逃げ帰ったり、数回の渡航が失敗しても辛うじて助かるとすぐに次の計画に取りかかったりして、並々ならぬ熱情と「不屈な闘志」で始終渡日のことに没頭する。しかし、そのような必死の努力にもかかわらず、不運にも途中病を得て異郷で客死してしまった。幸運にはめぐまれなかったが、栄叡の執着は人の心を震撼させずにはおかない。

三

栄叡、普照を除き、残った三人の入唐僧は資料に記録されたことなく、「歴史の暗部」に属していると言えよう。このような人たちの生き方にも作者は深い思いを寄せた。三人は多様な人生のありかたのいわばタイプとして取り上げられたのだろう。

その中で、玄朗の名は『東征伝』に三回ぐらい現れるが、詳しく書かれていない。ただ栄叡と普照が唐にいた時、玄朗もすでに唐にいて、一回目の渡航にともに捕われた後、「それきり分かれた」ということだけが分る。一方、『天平の甕』の中には、玄朗が「容貌も整えていて、どことなく育ちのよさがその言動の中に感じられた」人物として描かれた。この若い僧は「何もかもこの目で見、この耳で聞く。広い唐土の全部から俺は吸収すべきものは吸収してしまう」決心を持ちながら、栄叡と普照と同じ船で唐に渡った。それから七年も長安に滞在し、一緒に揚州に行った。鑒真和上一行の一回目の渡航が失敗した後、帰国せず唐に残ることになった。その後、運命のいたずらで留学生生活を持ち崩し、僧籍から脱し、唐女と結婚して脱退者となった。一度妻子同伴で日本に帰りたいとも迷ったが、結局「留学僧として唐土を踏んだが、二十年間に何一つ身につけなかった」と身の上を恥じてたまらず、帰国を思いとどまった。井上氏は作品中、普照を通して玄朗のことを次のようにまとめている。「玄朗の生き方は、留学僧としての立場からみると、勿論いろいろ批判すべきものを持っていたが、併し一個の人間としてみると、少しの批難すべき点はないようであった。」

戒融と業行は『東征伝』にその名を出していない。その名を持っている入唐僧が歴史上にいたことのみ記録に残っている。作者はその名を借り、『天平の甕』に登場させた上、それぞれ一つずつの役割を受持ってもらったという。作品における僧戒融は「人生の苦しみというものは、結局は自分自身しか解らないということだな。そして自分は自分で処理するしか仕方がないものだ」と悟った人である。唐に着いてから大陸の広さにとりつかれ、「自分の足でこの広大な土地を歩けるだけ歩いてみよう」という浪人風の生き方を選んだ。それで徐々に帰国気をなくし、最後に日本へ帰ったかどうかともわからない。

業行は三十歳過ぎてから唐に渡ったが、「とうとう陽が当らなかった」。「自分が幾ら勉強しても、たいしたことはないと早く判ればよかったんですが、それが遅かった。」このように自分の才能の限界を意識し、勉学をあきらめてから、命を懸けて何十年間続けておびただしい量の經典を写して日本に持ち帰る仕事に没頭した、その仕事に雄大な夢を託すことになる。「私の写したあの經典

は日本の土を踏むと、自分で歩き出しますよ。私を棄ててどんどん方々へ歩いていきますよ。多勢の僧侶があれを読み、あれを写し、あれを学ぶ。仏陀の心が、仏陀の教えが正しく広まって行く。仏殿は立てられ、あらゆる行事は盛んになる。寺寺の荘厳は様式を変え、供物の置き方一つも違って来る。」しかし、業行が長年かかって写した經典類は、帰国の途中暴風雨のせいで業行自身と共に海底に沈んでしまった。

鑑真たちの名は史書に残って、その苦労と努力が報われたと言えようが、業行のような人たちは無名にとどまり、その努力が人に知られないまま、歴史の大きな流れに埋もれて行った。この確実な喪失感と悲痛さは人々の心を攪むのである。「一生かけてやった仕事が、すべて水泡に帰してしまったわけですが、この人の考え方や、生き方はやはり立派であったというほかありません。」

⁵⁾ そういう報われなかった熱情の偉大さとその生き方の立派さこそ読者の心を動かすのである。

四

『唐大和上東征伝』では、冒頭から、鑑真の出身と生涯について紹介する。「大和尚讳鉴真，扬州江阳县人也，俗姓淳于，齐大夫髡之后。」⁶⁾（大和上の本名は鑑真。揚州江陽県の出身で、俗姓は淳于。斎の大夫髡の子孫である。）原稿用紙二、三十枚ぐらいの短い文章の中に、「和上」あるいは「大和上」という呼び方が五十回以上も現れる。この高僧の伝記は鑑真がさまざまな困難を嘗め尽くした結果、日本に渡って法を弘める経過を記述した。鑑真のことが中心に展開され、それ以外の人物は話題の流れに伴うシンボルとされ、たまに名前が登場しただけのように感じさせる。

それに対し、作品『天平の甕』では、鑑真という人物に対するアクセントを少し弱めて描いている。主要人物ともされているが、読者の目に入るのは小説の筋が三分の一まで進んだところである。また、この人物に対する直接的な描写も寥寥である。小説の展開は鑑真の生涯や活動を中心に描いているわけではなく、鑑真の言葉や、心理描写もめったに見えないせいか、その性格もあまりはっきりしていない。大体周囲にいる留学僧普照、栄叡たちの目を通して、その不拔の精神と卓越した人格を表す。鑑真が読者に与えるイメージは、むしろ法のために日本に渡航する粘り強い意志の象徴だろう。作品中、最も印象的な言葉は「法のためである。たとえ渺漫たる滄海が隔てようと生命を惜しむべきではあるまい。お前たちが行かないなら私が行くことにしよう。」『唐大和上東征伝』にも「是为法事也，何惜生命？诸人不去，我即去耳。」⁷⁾（これ、法のためなり。生命惜しむべからず。皆行かずば、我参ず。）とある。井上氏は『天平の甕』を書いた際、「『東征伝』に名前をのぞかせている何人かの人物に血と肉を与える仕事が作家としての私に残されているだけだという気持ちだった」⁸⁾とおっしゃったが、鑑真の場合は血も肉も少なく、恐らく骨だらけだろう。『天平の甕』における鑑真という登場人物は遠くてぼんやりとした影に似ていると思われる。話の展開には欠かせないが、あくまでも背景としての存在で、いささか平板化すぎるように感じさせるが、そのおかげで他の主要人物は対照的にいきいきと、くっきり浮き彫りにされた。

五

『天平の甕』は栄叡、普照、玄朗、戒融、業行という日本入唐僧たちの運命を描き、当時留学僧の典型的、かつ可能的な生き方を五種類に分けて見せてくれた。いずれの人物にも作者の真剣な考えが託されているだろうが、井上氏は歴史的な偉大な人物より、平凡な、普通の人間の生き方により大きな関心を示したと思われる。無名な人が世間に知られず、素直にこつこつと仕事に身を投じて、その人生に熱情を注ぐ様子を描いて、普通の人間が生きるためにかけた努力の中に

その人なりの偉大さを見つけ、人間の存在意義をはかる在来の基準に疑問を投げかけたのではない。

作者は入唐僧たちを通し、平凡な個人がした努力と歴史上の偉大な人物の貢献とを比べて、どちらが貴重であろうかという問題を提示した。正しい経典類を日本に伝えるために数十年間部屋に閉じこもって夥しい量の経典を写す仕事に没頭し、最後にその身と一緒に海底に沈んだ業行。同じように何十年もかけて、十数回の渡航に失敗した結果、色々な苦勞がもとで失明し、ようやく日本に渡って授戒する鑒真。勿論歴史上は鑒真の名が残って、業行は誰も知らないまま歴史に埋もれたが、二人の尽くした努力と熱情をいくら較べても、どちらがより尊く、より大事なものかを決めるのは難しいだろう。

小説の中でもこういうように述べている。「併し、普照にも、鑒真の渡日と、業行が一字一句もゆるがせにせず写したあの歴大な経典の山と、果たして故国にとってどちらが価値のあるものであるかは、正確に判断がつかなかった。一つは一人の人間の生涯から全く人間らしい生活を取り上げることによって生み出されたものであり、一つは二人の人間の死と何人かの人間の多年に亘る流離の生活の果てに始めて齎されたものであった。それだけが判っていた。」

確かに、事実から言えば、業行と鑒真の尽くした努力と払った代償はどちらが多いとは言えないが、その結末には雲泥の差がある。一人は史書に名をとどめたが、もう一人は永遠に歴史の流れの中に没し去った。人間の存在意義を計る基準は多元的で、その人が成功したかどうかをもって計れるものではない。結果がどうあれ、理想のために貫いたその強靱な意志と尽くした努力を無視するわけにはいかないし、簡単に比べることもできない。一生懸命に粘り強く頑張ったが、歴史に忘れられた無名な人間たちの努力も忘れてはならない。作品『天平の薨』に於いて作者は、報われなかった業行の熱情と、報われた鑒真の努力に、等しい敬意を注いでいるだろう。

業行という人物については作者自身がこう言っている。「この不幸な人物も、日本文化移入のために大きい役割を果たしていると言わなければなりません。この業行のような不運な留学生も他にたくさんいたと思います。日本文化は、こうした人たちの貴い犠牲に於て花咲いているということを忘れてはなりません。」⁹⁾ こうした色々な運命を持った若い留学生、留学僧の犠牲の上に、天平の輝かしい大陸からの文化移入は為されたのである。これこそ小説『天平の薨』の主題であると思われる。

六

井上氏はこう言ったことがある。「私はなべて人間と言うものは、それぞれの運命を持っていると考えております。その運命の路線の方向をねじ曲げることは人間の力ではできないかも知れません。しかし、その運命の持つ意味というものは、変えることができるのではないかと思います。その力を持つものは人間の誠意であります。」¹⁰⁾ 小説『天平の薨』における人物たちはそれぞれ並々な誠意を持って自分の人生を真面目に生きたのである。作者井上靖も誠意を持って、人間の運命を描写することを通し、自分の運命観を表して「人生を肯定する立場に立っていたい」と、無常な人生における人間の存在の意義を認めた。

確かに、人生ははかないし、人間の運命もはかり知れない。人間が努力しても、成功できるかどうかは運命に任せるほかない。人間の行動は多方面からの制約に縛られ、悠久たる歴史と予測できない運命の前にはきわめて弱く小さい。しかし、「人生は使い方によっては十分長いものであり、十分尊いものであり、十分美しいものである。」¹¹⁾ 平凡な人たちが、理想のために自分のあらゆる努力を注ぐ姿勢にこそ、人間が存在する素直な本当の様子が窺える。たとえ人間の理想が情けない運命に巻き込まれても、その懸命に尽くした努力は他の人を感動させ、影響を与える。しかも、人間の努力は運命の無常によって成功も失敗もあり得るが、その努力と不屈の意志こそ

一番大事で、人を尊敬させ感動させる力を持ち得る。

「歴史小説というものは、結局のところその時代時代のぎりぎりの条件のもとで生きた人間の姿を通じて、歴史そのものの持つ運命相に迫るものであろう。」¹²⁾と福田宏年氏は述べている。『天平の薨』はまさにそのような作品である。井上靖氏は精一杯生きた人間の姿を描き、悠久たる歴史に翻弄される人間の運命を見事に描写したと同時に、人間存在の真実と美しさを見出すことに成功し、読者を感動させることが出来たのだろう。

注釈

- ¹⁾ 蔵中進『唐大和上東征伝の研究』、桜楓社、1976年、315頁
- ²⁾ 蒲生芳郎「天平の薨」、長谷川泉編『井上靖研究』、南窓社、1974年、260頁
- ³⁾ 本文における『天平の薨』からの引用はすべて『井上靖全集』（第12巻、新潮社、1996年）による。
- ⁴⁾ 井上靖『井上靖全集』（別巻）、新潮社、2000年、188頁
- ⁵⁾ 井上靖『井上靖全集』（別巻）、新潮社、2000年、192頁
- ⁶⁾ 真人元開『唐大和上東征伝（汪向荣注釈）』、中華書局、2000、33頁
- ⁷⁾ 真人元開『唐大和上東征伝（汪向荣注釈）』、中華書局、2000、42頁
- ⁸⁾ 井上靖『井上靖全集』（別巻）、新潮社、2000年、185頁
- ⁹⁾ 井上靖『井上靖全集』（別巻）、新潮社、2000年、192頁
- ¹⁰⁾ 井上靖「星と祭」、『井上靖全集』（第20巻）、2000年、537頁
- ¹¹⁾ 井上靖「わが一期一会」、『井上靖全集』（第23巻、1997年、373頁
- ¹²⁾ 福田宏年『増補 井上靖評伝覚』、1991年、198頁

参考文献

『井上靖全集』（全28巻・別巻1） 新潮社 1995年—2001年
長谷川泉編 『井上靖研究』 南窓社 1974年
福田宏年著 『増補 井上靖評伝覚』 集英社 1991年
蔵中進『唐大和上東征伝の研究』 桜楓社 1976年
真人元開著『唐大和上東征伝（汪向荣注釈）』 中華書局 2000年

（平成22年3月31日受理）